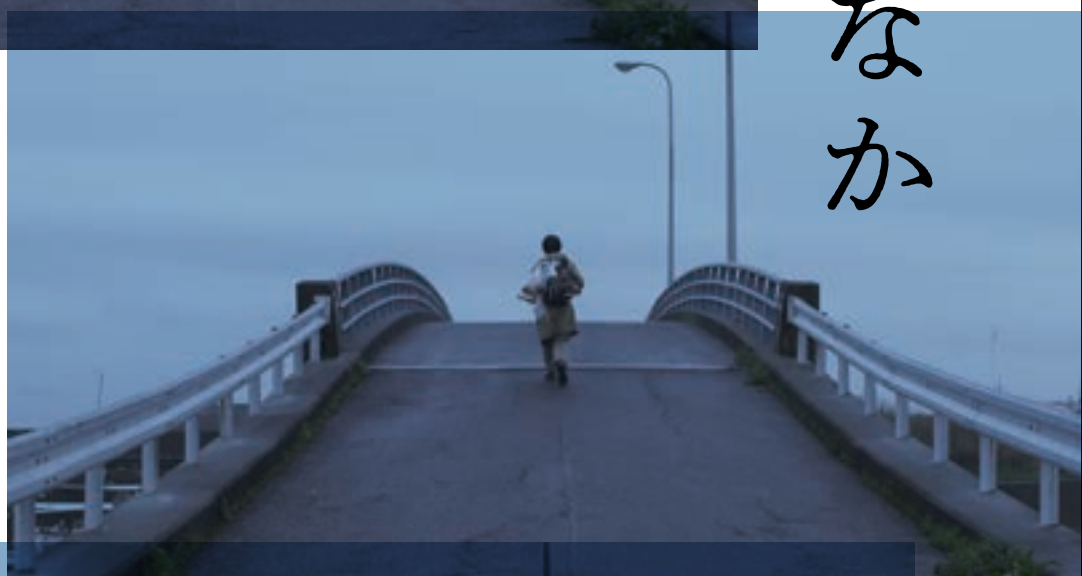
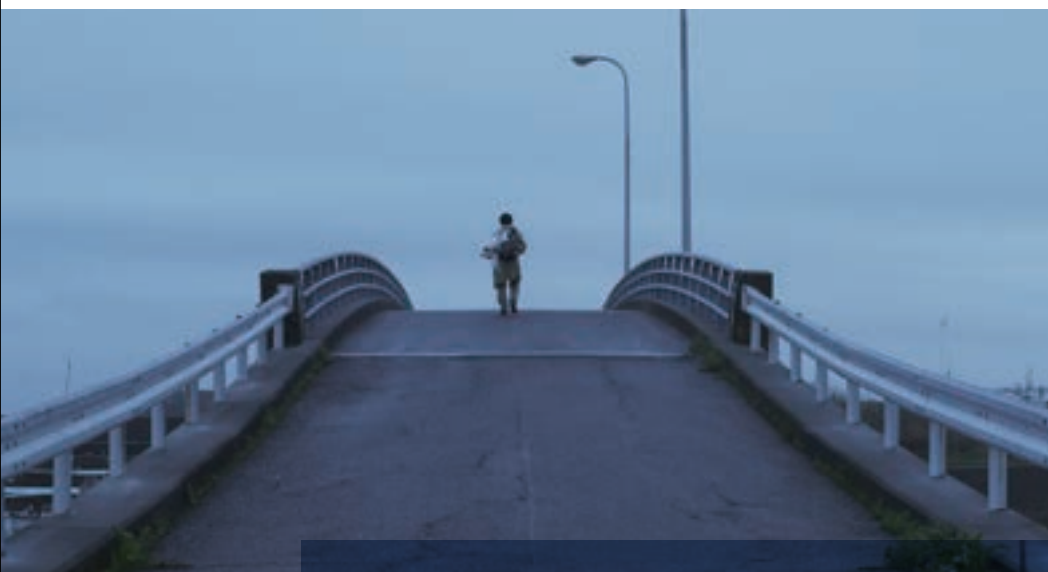


立教学院創立150周年記念

道のただなか



VIA MEDIA — 私たちは真理を求めて、

絶えず道のただなかを歩み続ける旅人である

監督・脚本・編集：鶴岡慧子（立教大学現代心理学部映像身体学科卒）

企画・製作：学校法人立教学院

解釈し続ける、
歩みを続ける、
旅を続ける

「君は、自分の作品撮らないの？」
「撮りたいな、とは思んですけど、
じゃあお前は一体何を撮りたいんだって
聞かれたら、分かんなくて」
「そう聞かれるのが、怖いの？」

問題。
ウィリアムズ像は
なんで右手をベストのポケットに
入れてるでしょう。

Message from film director メッセージ

立教大学で過ごした4年間、人様に迷惑をかけながら映画づくりに明け暮れ、最後は逃げるように卒業しました。しかし今回、作品づくりを通して立教と出会い直すきっかけをいただき、母校はどこまでも懐が深いことを思い知りました。若松プロデューサーから最初に渡された『RIKKYO BOOKLET1 立教の創立者 C.M.ウィリアムズの生涯』を読み、ウィリアムズ主教についてなにも知らなかった自分を心底恥じながら号泣し、出来損ないの卒業生としては、この経験もひっくり返して映画にするしか（でき）ないと思いました。

俳優さんも立教ゆかりの方々にお集まりいただき、スタッフさんにも立教について知っていたきながらの撮影は、不思議な連帯感と親近感に包まれた旅路でした。本作をご覧いただく皆様にも、ウィリアムズ主教と出会う道程をお楽しみいただければ幸いです。

立教で学んで良かったと、今、心から思います。ウィリアムズ主教の大いなる教えと規格外の魅力、それから〈立教と映画〉の歴史に、最大の敬意を表します。

2024年4月

監督・脚本・編集 鶴岡慧子

立教大学現代心理学部映像身体学科で万田邦敏監督に師事。卒業制作の初長編映画『くじらのまち』がPFF（ぴあフィルムフェスティバル）グランプリとジェムストーン賞（日活賞）をW受賞。東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻に進み、黒沢清監督に師事。卒業後、PFF スカラシップ作品『過ぐる日のやまねこ』で劇場デビュー。同作はマラケシュ国際映画祭審査員賞を受賞。2023年に公開された最新作『バカ塗りの娘』では青森の伝統工芸である津軽塗の職人父娘を丁寧な描写で描き、フランス・パリにて開催された「KINOTAYO 現代日本映画祭」で最高賞のソレイユ・ドール賞、第74回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

出演：渡邊 甚平 中川友香 内田健司

小林宏治 柳 時京 石垣 進 喜多ゆう子 牛島幹夫
野村和矢 大山陽太 高野 酉 上山 柚 高橋和花
川船紀世 酒井美奈 貝嶋美紗希 西川もも 藤井光葉
豊福葉々子 富永彩花 今井愛梨

プロデューサー：若松壮平 ラインプロデューサー：大川哲史
撮影：山本大輔 照明：秋山恵二郎、山田真穂 音響：黄永昌 衣裳：藪野麻矢
ヘアメイク：光岡真理奈 助監督：小宮山みゆき アニメーション：佐藤美代 音楽：中野弘基
制作主任：金井塚悠香 アシスタントプロデューサー：玉林亜理
企画・製作：学校法人立教学院 製作：NHK エデュケーションal 制作プロダクション：ザフル

Story ストーリー

立教学院が卒業生・在校生とともに送る 青春ロードムービー

立教大学に通う慎平は映画サークルのメンバー。学内で自主映画の上映会を行ったが、なぜか気分は晴れない…。「ウィリアムズ像が、どうして右手をポケットに入っているか知っている？」そう言って先輩から手渡されたのは1冊のリーフレット。19世紀半ばに、キリスト教伝道のために日本へやってきた、立教の創立者ウィリアムズ主教の伝記だった。明け方、泣きながら読み終えた慎平は、突如として旅に出る――。

日本に滞在した50年の間、母国アメリカへはわずかに数回しか帰国しなかったウィリアムズ主教。その大いなる慈愛と熱情を、時にユーモラスなエピソードを織り交ぜながら描き、今を生きる若者の心の変容を映し出す。監督・脚本に鶴岡慧子、メインキャストに渡邊甚平ら3名の卒業生を迎え、さらに現役生たちが脇を固める“オール立教”で、創立150年の節目におくる青春ロードムービー。物語のラスト、慎平に起きる奇跡を、お見逃しなく。

公開：立教学院創立150周年記念サイトほか